

向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

前田 桂子

The List of Dialects in "Hōchū Biyō Wamyō Honzō"

Keiko MAEDA

はじめに

『庖厨備用和名本草』は医食同源に基づいて、食品に関する知識を記述した本草書である。中には、現代では使われなくなった方言語彙が見られ、近世長崎の方言を知る上で貴重である。本稿では、同書の方言をリストアップし、『物類称呼』と対照させるとともに、現代語の方言としてどの地域で使用されているかを注記した。各語の詳細な分析については稿を改める。

著者について

著者の向井元升(以下、元升と称する)の来歴と述作に関しては、若木太一氏「向井元升著述考―東西文化の接触―」に詳しい。元升は、慶長一四(一六〇九)年に現在の佐賀県神崎市に生まれ、九歳から五〇歳までを長崎で過ごし、長崎市中に中島聖堂や私塾「向井

社学輔仁堂」を開設するなど、四〇年余りにわたって長崎の学問の発展に大きく寄与した儒学者である。著述活動も盛んで、本書『庖厨備用和名本草』一三卷(一六七二)以外に、『紅毛流外科秘要』七卷(一六五四)、『知耻篇』三卷(一六五五)、『乾坤弁説』四卷(一六五六)などがある。松尾芭蕉の弟子向井去来の父としても知られる。

資料について

『庖厨備用和名本草』は大本一三卷一三冊、寛文十一年(一六七二)序で、貞享元年(一六八四)に書林、小野善兵衛・梶川儀兵衛から刊行されている。成立事情は自序に詳しく述べられている。それによると、加賀藩の前田綱紀公は体が弱かったために老臣達が食事の栄養面を心配していたという。そして、

老臣前田対州孝貞欲辨食物良毒、為一篇、備之庖厨、以使膳夫無調飪之失。遂投書需之。(中略) 於是取東垣先生食物本草略譯之、以時珍先生綱目助之。其倭名主源氏倭名鈔助以林氏多識篇。謹附臆説以為俗解。書考十有卷題曰庖厨備用倭名本草。

とあるように、前田孝貞が、料理人が調理の際に過失を犯さないように、食物の良毒を弁じた書物を厨房に備えたいと欲し、その執筆を元升に手紙で頼んだ。そこで元升がこれに応じ、中国の医者である李東垣(一一八〇〜一二五〇)の食物本草を訳し、李時珍(一五一八〜一五九三)の『本草綱目』で内容を補ったとある。各項目の日本名については、主に源順(九一一〜九八三)の『倭名類聚抄』を参照し、林羅山(一五八三〜一六五七)の『多識篇』で補いながら元升自身の考察を加えて編んだものである。

本稿の目的

『庖厨備用倭名本草』(以下、『庖厨』と略す)は食品の本草書であるが、その食品名には共通語と共に、異称(特に地方での名称)を注記した箇所がある。その意図は、植物や魚類には多種多様な類似のものがある上に名称も多様であることから、混乱を避けることを目的としたと考えられるが、言語研究の立場で見ると、そこに方言資料としての価値を見出すことができる。長崎の方言辞典は各種出版されており、概念的な語や文法形式に関してはよく載っている一方で、動物や植物の異称に関しては必ずしも取り上げられていない場合が多い。また、それが近世期のものとなればなおさらである。例えば本書に見られるマクチはボラを指すとあるが、『長崎県方言大辞典』にも見えず、『日本国語大辞典』にも現代語としての掲載

がない。しかし、『物類称呼』や『日葡辞書』には載せられている。また、今回は取り上げなかったが、『グラバー図譜』には精密な絵とともに方言としてマクチの語形が注記されている。つまり、本書からは現代失われた近世初期の長崎方言を知る手がかりを得ることができるのである。それにも関わらず、未だ研究されていないため、まずはその語形を書き出しておく事も意義があると考えた。本書の各項目には本草学的な詳細な解説があるが、紙幅の関係で、方言形の名称と、簡単な必要最小限の説明のみ抜粋した。

本書は全巻を通じて、元升自身の考察部分を示す箇所には必ず「元升曰」とあり、方言形は「西国」「長崎」などの地域名を記した後に表示される。そこで本稿では、こうした記述を抜粋し、それとともに近世の方言書として欠くことのできない『物類称呼』、さらに『日本国語大辞典第二版』中の方言の記述を示した。これにより、近世における方言としての位置づけと、現代までの地域的な広がりを追うことができる。具体的には次の凡例の通りである。

凡例

- (一) 元升の示す地域に沿って「長崎」、「肥前」、「筑前」、「西国」、元升の注記はないが『物類称呼』で指摘のある語、外国語由来の語の六つに分類し、各語ともそれぞれ五十音順に示した。
- (二) 各語の見出しは【 】内に発音をカタカナ表記、「」内に本書の語彙表記を示した。その後語の説明、(引用箇所)を示した。
- (三) 『庖厨』の掲載語は漢字の左右にカタカナの読みが記されている。本稿では右から順に挙げ、/で区切る。例…「サンツ／蠶」

豆／ソラマメ／ナツマメ」。資料では次の通り…



- (四) 『物類称呼』に記載がある場合には(物類)として、該当箇所を抜粋し、版本の引用箇所を示した。
- (五) 『日本国語大辞典第二版』に方言の記載がある場合には(現代)として、使用地域を挙げた。項目のみあって方言注記が無い場合には、「共通語」と注記した。
- (六) (古賀)は古賀十二郎『長崎市史風俗編』の記述、(古賀之)は同氏『外来語集覧』(長崎文献社)の記述である。
- (七) 特に注記が必要と思われた場合に*の後に記述した。
- (八) 本文中の傍線は関係箇所について、前田が私に施した。
- (九) 本書の見出しで活字がない場合は、便宜上、部首に分けて「土+従」のように表記し、文字の画像は巻末に注として挙げた。

以下、本書記載の地域別に分けて五十音順に方言語形を列挙する。

〈長崎における名称を示したもの〉

【キンマ】「キヨシヤウ／蒟醬／キンマ」・・○元升曰此ノ説ヲ

ミレハ蒟醬ハ其ノ實ライヒ浮留藤ハ其ノ苗ヲ云昔シ暹羅

東埔寨交趾南蛮諸国ノ人長崎ニ来ル時キンマト云モノヲ

食セリ蛮語ニハヘイテレット云(巻五・二七ウ)

(現代) 共通語

前田・向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

【キタゴ】「レイキヨ／鱧魚／キタゴ」・・○元升曰此説ヲミレ

ハ鱧ハハムニ非ス・・長崎海中ニキタゴト云魚アリ其形イロアヒマダラ文アリテ本草ニ載タル鱧魚ノ説ノ如シ。キタナク。ミグルシク。ヲソロシク。ニクカルベキナリアヒ也日本人ハ食スルモノナシ大明ノ南人ハ是ヲ珍物トセリ・・(巻八・二一ウ)

(現代) 掲載なし

【サンコヘイ】「シャボクメン／くさかんむり+紗^① 木 晒／サン

コヘイ」○元升曰・・異国ヨリ毎年来ルサンコヘイナルヘキカ余長崎ニ住セシ時唐人ニサンコヘイノ文字ヲ問ヘハ西番米ト書キ或ハ西国米ト書タリ」(巻七・七オ)

*『日本国語大辞典』にさいこくまい(西国米)の掲載はある。

【シロウオ】「ギンキヨ／銀魚」・・○元升曰白ウヲニ此類アリ

長崎ニハ臘月正月に此ノ魚アリ シロウヲト云・・(巻八・一九オ)

(物類) 麴条魚(略) 筑紫にて、しろうをと呼(略) 江戸に云白魚より小也

【ナンキンコシヨウ】「番椒」・・○元升曰、番椒ハ西国俗ニ云

フナンバンゴセウナルベシ京関東ニテタウガラシト云フ・・近年南京ヨリ長崎ニ二種キタル俗ニ南京コセウト云フ(巻二・二一オ)

(現代) ナンバンコシヨウが岐阜にあり。

【ナンバンガキ】「ムクワクワ／無花果／イチシク」・元升ノ

曰長崎ニ此ノ果アリ俗ニナンハンカキト云(巻七・四オ)

(現代) 香川、熊本

以上は、「長崎にあり」という記述のある語であるが、現代ではほとんど長崎方言としての掲載が見られなかった。このうち、ナンバンガキだけは近県に方言として生きていた。

〈肥前における名称を示したもの〉

【アコヤ】「シヤカウ／車螯」 多識篇オホハマグリ○元升曰此ノ

カヒ未ダコレヲ見ズ本草ノ註ニアルヒハタマヲ生ストイヘリ肥前大村ノ内海ニアコヤトイフカヒアリヨク真珠ヲ生ス・・(巻九・一八)

(現代) 共通語

【エツ】「セイキヨ／鱈魚／エツ」・多識篇ニタチウヲ・・○

元升曰肥前ノ寺江ニエツト云魚アリ形本草ニ出タル如シ(巻八・七オ)

(現代) 掲載なし

*本草綱目には筑後柳川と肥前寺江にありとある。

【カブナ】「ラマ／蘿摩／カブナ」・元升曰此註ヲミレハ蘿摩

ハ肥前ノ山野人ノカフナト云モノナリ(巻五・一七ウ)
(現代) 新潟、広島、福岡、長崎、大分

【カレイ】「ヒモクギヨ／比目魚／カレイ」 倭名鈔ニ比目魚ナシ

多識篇ニ和名ナシ 考本草一名窮魚一名鞋底魚海中ニ生スナリ アヒ牛腓ノ如シ細鱗紫白色其半辺ハ平ニシテ鱗ナシ 口ハ顎下ニアリ○元升曰此説ヲミレバカレイ也鞋底魚トイヘルハ肥前ノ俗ニカレイノホソキヲクツゾト云ニ同シ世俗ニイシガレイト云類也倭名鈔ニ王餘魚ヲカレイト云ハ非也(巻八・三〇ウ)

(物類) かしい。ひらめ○畿内西国ともに。かしいと称す・・(巻二・一〇ウ)

(現代) 新潟、静岡、上方、広島、山口、大分、(福岡ではカリイ)

【クツゾコ】「ヒモクキヨ／比目魚／カレイ」・元升曰此説ヲ

ミレバカレイ也鞋底魚トイヘルハ肥前ノ俗ニカレイノホソキヲクツゾコト云ニ同シ世俗ニイシガレイト云類也・・(巻八・三〇ウ)

(現代) 熊本(佐賀ではクチゾコ)

【マクチ】「鱈魚／ナヨシ」 倭名鈔ニナヨシ多識篇ニ同シ神代ノ巻

ニクチメ 考本草身圓カニ頭扁メニヨク泥ヲ食ス 鱗ニ黒斑点(クロマダラノホシ)アリ腹ニ黄脂満リ味美ナリ云々 ○元升曰ナヨシハ其類多シ俗ニボラト云イセ鯉ト

云 肥前ニテマクチト云又シクチト云アリ(巻八・四オ)

(物類) なよし。なよし。ぼら。伊勢こい 長崎に。ま
くちと云(巻二・一〇オ)

(現代) 共通語

*日葡辞書〔1603~04〕「Mauchi(マクチ)〔種魚。ぼら〕」

アコヤは現代では方言とはいえないが、カブナ、カレイ、クツゾコ、マクチは西日本内に偏っているという傾向があった。

〈筑前における名称を示したもの〉

【キンタケ】「ケイシウ／鶏 土+従²」和名鈔ニ鶏土+従ナシ多識

篇に和名ナシ考本草一名鶏菌其ノ味ニワトリニ似タリ故
ニ名ツク・・・○元升曰筑前ニ金草ト云アリ(巻五・九オ)

(現代) 鹿児島

【セツカ】「ボレイ／牡蠣／カキ」・・・大キナルアリ小サキア

リ・・・肥前筑後ノ海中ニアリ土人スベテカキト
云・・・又俗ニ石花ト云フ(巻九・一一ウ)

(現代) 福岡、佐賀、長崎、宮崎

【ハクラ】「ロキヨ／鱸魚／ス、キ」・・・元升曰・・・本草ノ註

ノ如キハ疑ナクスギキ也；筑後柳川ノ入江ノ海ザカヒ

前田・向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

二。ハクラト云魚アリ(巻八・一〇ウ)

(現代) 福岡、佐賀、熊本

「筑前」という記述は三語にしか見られなかったが、現代でも九州内で使用される方言であった。

〈西国における名称を示したもの〉

【アオサ】「カンタイ／乾苔／アヲノリ」 ○又西国海中ニアヲサ

ト云昔アリ(巻四・三五オ)
(現代) 三重、山口、香川、沖縄

【アザミ】「タイケイ セウケイ／大薊 小薊／オオアザミ アザ

ミ」○元升曰西国俗ニ大薊ヲオニアサミ小薊ヲアサミト
云・・・(巻五・一六ウ)

(現代) アザミ、オニアザミともに共通語

【アシクダチ】「フクボンシ／覆盆子／マイチゴ」 ○元升曰右ノ

説ヲミレハ蓬蘽ハアシクダチ覆盆子ハマイチゴ蘼ハクサ
イチゴ、懸釣子ハ木イチゴ蛇莓ハクダチナワイチゴ此五種
ノ和名ヲ西国俗ニイヘリ(巻七・一三オ)

(現代) アシクダチは掲載なし *あしくだし(大和本草
にアシクダシ(西国方言)とある。

【ウバガイ】「ガフリ／蛤蜊／ウワカヒ」 ○元升曰此ノカヒハ西

国ノ海浜沙中ニアルウハカヒナルヘシウバガヒノナリハ

蜆ノ如クニテ大キナリ：(卷九・一七オ)

(現代) 共通語

【カニユウ】「エイイク／蓼羹／カニフ」○元升曰此註ヲミレハ

西国ニテカニフトイヘルモノナリ山野ニ生ス・・野葡
萄トモイヘリ(卷七・一一ウ)

(現代) 沖縄宮古にジャンカニユ(丸葉グミ)

【キイチゴ】「フクボンシ／覆盆子／マイチゴ」○元升曰右ノ説

ヲミレハ蓬蘽ハアシクタチ覆盆子ハマイチコ蕪ハクサイ
チコ、懸釣子ハ木イチコ蛇莓ハクチナワイチゴ此五種ノ
和名ヲ西国俗ニイヘリ(卷七・一三オ)

(現代) 長野、山形

【クサイチゴ】「フクボンシ／覆盆子／マイチゴ」○元升曰右ノ

説ヲミレハ蓬蘽ハアシクタチ覆盆子ハマイチコ蕪ハクサ
イチコ、懸釣子ハ木イチコ蛇莓ハクチナワイチゴ此五種
ノ和名ヲ西国俗ニイヘリ(卷七・一三オ)

(現代) 山形、岡山

【クチナワイチゴ】「フクボンシ／覆盆子／マイチゴ」○元升曰

右ノ説ヲミレハ蓬蘽ハアシクタチ覆盆子ハマイチコ蕪ハ
クサイチコ、懸釣子ハ木イチコ蛇莓ハクチナワイチゴ此
五種ノ和名ヲ西国俗ニイヘリ(卷七・一三オ)

(物類) クチナワイチゴ

(現代) 京都、和歌山、鳥根、岡山、熊本、長崎

【ギギユウ】「アウシ／魚＋央＋皿^③ 絲 魚」○元升曰此魚ギット

云ヘキカ西国俗ニギギウト云：(卷八・二一オ)

(現代) 群馬、埼玉、広島、福岡、熊本

【コキビ】「シヨク／稷米／キビ／コキビ」○元升曰西国ニテコ

キビト云 (卷二・六オ)

(現代) 新潟、富山、石川、長野、岐阜、兵庫、奈良、鳥

取、鳥根、山口、高知、徳島、愛媛、香川、福岡、

長崎、熊本、大分、鹿児島

【コモ】「セキシユン／石蓴／コモ」○元升曰西国ニコモト云海

草アリソノ様本草ノ説ノゴトシ(卷四・二八ウ)

(現代) 共通語 福島ゴモがみえる。

【ササグリ】「リツ／栗／クリ」○元升ノ曰西国俗にサ、クリト

云小小栗トカケリ(卷六・七ウ)

(現代) 熊本県玉名市

【シカ】「トククワツ／独活／ウト」和名抄ニウド一云ツチタラ多

識篇オナジ・・西国俗ニ土中ニテ芽ヲ生シタルヲホリ
取テウド、イヒ苗生シテ数寸ナルヲ。トセント云土前ノ
義ナリ稍長シテ少シ枝葉アルヲ鹿好シテ食ス故ニ名ツケ

テシカト云。・・(卷五・二六ウ)

(物類) うど○西国にて。しかといふ 西国にては土中に
有を。独活といひ 二三寸地上に生じたるを。う
どといふ (巻三・五ウ)

(現代) 福岡、佐賀、大分、宮崎

【シシカイ】「クワイカウ／魁蛤／アカ、イ」・・・元升曰今俗
皆アカ、ヒト云キサト云フ名ヲシルモノナシ是レ物ノ名
ノ古今カハリタルユヘナリ・・・アカヰビノ栗クリノ大キサ
ホドナル。殻カラアツク。イラカタカキヲハ関東ニテハサル
ボウト云フ西国ニテハシ、カヒトイフ (巻九・一九オ)

(現代) 掲載なし 『筑紫方言』にあり

【ジュズダマ】「ヨクイニン／薏苡仁」・・・元升曰西国ニテ

ジュズダマト云俗ニ是ヲス、タマトイヘリ (巻二・一二
オ)

(現代) 静岡、島根、山口

【シラモ】「リウシユサイ／龍鬚菜／シラモ」○元升曰此註ヲミ

レハ西国俗ニ云シラモ也 (巻四・三二オ)

(現代) 共通語

*本草和名〔918頃〕「石一名海蓴、和名古毛」

*名語記〔1275〕五「海草にこも、如何。こも
は石也。海蓴ともかける歟」

【スミラ】「キンサイ／莖菜」西国民間ニ食スルハスミレニハアラ

前田・向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

ススミラト云トイヘトモスミレスミラ同シカルベシ (巻
三・一九オ)

(現代) 宮崎、鹿児島、長崎

【タイトウ】「セン／(禾+山)米^④」／タイタウゴメ ○元升曰
此註ヲミレハ禾+山 米ハ西国ニ多キタイタウナルヘ
シ (巻二・四オ)

(現代) 方言記載なし 大唐米か。

和玉篇〔15C後〕「アキゴメタイタウコメ」
日葡辞書〔1603~04〕「Tatigome (タイ

タウゴメ)。すなわち、タウボシ」重訂本草綱
目啓蒙〔1847〕一八・穀「禾+山 たいとう
ごめとうぼし筑前、とうぼうし加州糯米」

【タカナ】「スウ／シヨウサイ／菘菜／タカナ」○元升曰西国ニ

タカナ此説ニ似タリ (巻三・一〇オ)

(現代) 青森、岩手、宮城、東京、島根、鹿児島

【タチワキ】「タウツ／刀豆／ナタマメ／タテワキ」和名抄ニ刀豆

ナシ多識篇ニナタマメ○元升曰西国民間ニタテワキト云
(巻二・二九オ)

(物類) なたまめ○九州及四国にて。たちはきといふ (巻
三・四ウ)

(現代) タテワキ・・・徳島、高知

タチワキ・・・徳島、高知、福岡、大分、宮崎、

【タミナ】「クハラ／蝸螺／タミナ」：元升曰ニシハ大小ヒト

シカラストイヘトモ皆ナ海中ニアル螺也・・・元升曰
西国俗ニタミナト云アリ此ノ類ナルヘシ(巻九・二五
オ)

(現代) 長崎、熊本、宮崎、鹿児島

【チヌ】「ヨウギヨ／鱈魚／チヌ」：元升曰鱈魚ハ形ヒラメ

ニ頭大ニ色黒シ西国ノ俗ニチヌト云魚ナルヘシ(巻八・
二ウ)

(現代) 静岡、三重、大阪、兵庫、和歌山、島根、岡山、
徳島、香川、高知、愛媛、

【ナバ】「カウシン／香蕈／クサヒラ」 倭名抄ニ香蕈ナシ多識

篇 今案ニタケ又云クサヒラ○元升曰西国俗ニ云ナハ又
キノコ又云タケ・・・(巻五・四ウ)

(物類) たけ きのこと ○中国九州にて。なばといふ
(巻三・二一オ)

(現代) 兵庫、島根、岡山、広島、山口、愛媛、高知、福
岡、佐賀、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄

【ナワサバ】ナハサハ「チクキヨ／竹魚／ナハサハ」○元升曰此

註ノ如クナラハ西国俗ニ云ナハサハナルヘシ引ニシテ
ヨシ(巻八・四オ)

*『日本国語大辞典』によると「竹魚」はサヨリ。ナワサ
バはイルカのこと。ここでの意味は未詳。

【ナンバンゴシヨウ】「番椒」○元升曰番椒ハ西国俗ニ云フナン

バンゴセウナルベシ(巻一二・二〇ウ)
*唐辛子のこと。和漢三才図会にあり

【ハシヨウマメ】「ヘンツ／菘豆／アチマメ／ハシヤウマメ」和名

鈔ニアチマメ多識篇同シ又云ヒラマメ○元升曰西国俗ニ
ハシヤウマメト云八升豆ト書リ・・・又破ハシヤウマメ薺豆トカケリ
(巻二・二六ウ)

*肥前(重訂本草綱目啓蒙)

【フタナリ】紅豆 「リヨクツ／緑豆／フントウ／フタナリ」和名

抄ニ緑豆ナシ又赤小豆條下ニ緑小豆トイヘルハ此ノ緑豆
ナルヘシ多識篇今案ニフントウ○元升曰関東ニテハヤヘ
ナリト云京師ニテフントウト云西国ニテハフタナリト云
(巻二・二二オ)

(物類) ささげ・・・西国にては。ふたなりといふ(巻三・
二オ)

(現代) 長崎、熊本

【フツ】「ハクカウ／白蒿／ホウコグサ」○元升曰俗ニモチヨ

モキト云又モチフツト云凡ソヨモキヲ西国民間ニハ皆フ
ツト云京師ニヤクノ人ハモチフツヲ。ホウコグサト云(巻五・

一四オ)

(現代) 山口、香川、福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島

【ホウジョウ】「カイジヤウ／海蛸／ハウジヤウ」○元升曰西国

俗ニホウジヤウト云アリ(巻九・二五ウ)

(現代) 掲載なし

【ボウブラ】「ナンクワ／南瓜／ボウブラ」和名抄ニ南瓜ナシ多識

篇ニナンバンウリ○元升曰西国俗ニホウフラト云(巻

四・二二オ)

(物類) ぼうぶら○西国にて。ぼうぶら・・・(巻三・六オ)

(現代) 富山、石川、三重、香川、高知、長崎、大分、熊本、宮崎、鹿児島

【マイチゴ】「フクボンシ／覆盆子／マイチゴ」○元升曰右ノ説

ヲミレハ蓬蘽ハアシクタチ覆盆子ハマイチコ蕨ハクサイ

チコ、懸釣子ハ木イチコ蛇莓ハクチナワイチゴ此五種ノ

和名ヲ西国俗ニイヘリ(巻七・一三オ)

(現代) 長野県

【ミニナバ】「モクジ／木耳／ミニナバ」○元升曰西国ノ鄙俗ニミ、

ナハトイヒキラケト云(巻五・三ウ)

(現代) 山口、福岡、長崎、熊本、宮崎、鹿児島

前田：向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

【ミズイカ】「ジウキヨ／柔魚／ミツイカ」○元升曰此説ヲミレバ

西国俗ニミツイカト云是也此イカ骨ナシトイヘ共紙ノ如クニウスキ甲アリ・・・(巻八・三四ウ)

(現代) 語形として、島根県浜田市、香川、九州

【ユスラ】「エイタクウ／櫻桃／ニワサクラ」：元升曰西国ノ民間ニ

或ハユスラトモイヘリ(巻六・二五ウ)

(現代) 愛知、京都、山口、徳島、香川

【ロクカクサイ】「ロクカクサイ／鹿角菜／ツノマタ」和名抄ニツ

ノマタ多識篇同或云ヒシキ考本草東南海中石崖ノ間ニ生

ス長サ三四寸大サ鐵線(左訓：クロカネノイトスヂ)ノ

如シ・・・○元升曰西国ニロクカクサイト云アリ元ハ大

明商客(左訓：アキント)ノ持来タル近キ比ヨリ天草

邊ノ海中ニ出ルトイヘリ其ナリアヒ鹿ノ角ノ如シ・・・

(巻四・三〇オ)

(現代) 共通語

「西国」と記した語は三十五語見られ、方言形の注記としては最も多かった。おおむね現代でも西日本に分布する方言であることが多いようであるが、アザミ、タカナのように、現代では東日本に広がる方も見られた。フツ、ボウブラ、ミニナバは特徴的な九州方言である。葡萄牙語 *abobra* に由来すると言われるボウブラが現代では富山県、石川県で方言として使用されていることが興味深い。

〈特に方言注記は無いが、物類称呼で指摘のあるもの〉

【グチ】「カウキヨ／鮫魚」・・・○元升曰海辺ノ漁人ノ云フカノ

子ハ生ル時母ノ口ヨリ出テ母ニ随テ行驚ク時ハ又口ヨリ

腹ニ入ルツネニ母ノ腹中ニ出入ストイヘリ鮫魚ハフカノ

一類カフカノ背ニ珠アルモアリ珠モ亦多カラス (巻八・

三二ウ)

(物類) いしもち・・・西国及四国にて。ぐちと云(巻二・

二〇オ)

(現代) 新潟、静岡、大阪、兵庫、和歌山、鳥根、山口、

香川、愛媛、高知、福岡、熊本、鹿児島

【ゴウリ】 栝蓼 「ワウクワ／王瓜／ゴウリ／カラスウリ」和名抄

多識篇ニ王瓜ナシ・・・○元升曰此ノ註ヲミレバゴウリ

ナルヘシカラスウリトモ云フ (巻四・二六オ)

(物類) からす瓜・・・肥前にて。ごうりといふ (巻三・

七ウ)

(現代) 福岡、熊本、大分、鹿児島

【ナツマメ】 蚕豆 「サンツ／蠶豆／ソラマメ／ナツマメ」和

名抄ニ蠶豆ナシ 多識篇ニソラマメ○元升俗ニハナツマ

メト云 (巻二・二五オ)

(物類) そらまめ○東国にて。そらまめといふ 西国にて

。たうまめ 出雲にて。なつまめ (巻三・四ウ)

(現代) 山梨、静岡、愛知、兵庫、三重、奈良、和歌山、

岡山、広島、徳島、愛媛、福岡、佐賀、長崎、大分、

熊本、宮崎

【フクトウ】 ○河豚魚ハ調味修治ノ法ニ背キタルハ食スベカラズ

(巻一・一七ウ)

(物類) ふぐ○京江戸ともに。ふくとよぶ 西国及び四国

にて。ふくととうと云 (巻二・一四ウ)

(現代) 和歌山、長崎、熊本

【メハリグサ】「ハクカ／薄荷」・・・元升曰薄荷ハ其香龍腦ノ如

シ故ニ西国俗ニハ龍腦草ト云 (巻五・二九ウ)

(物類) はつか 和名めぐさ○西国にて。めはりぐさとい

ふ (巻三・一〇ウ)

(現代) 長野

以上の五語は、元升は方言と述べていないが、『物類称呼』では方言の記述がある語である。ゴウリも特徴的な九州方言として室町末期のキリシタン版である『日葡辞書』にすでに掲載されている。これについて、元升は方言という認識がなかったのかもしれない。あまりに身近で地元の人には気付かれにくい例であろう。

〈外国語由来の名称を示したもの〉

【アメントウ】「ハタンキヤウ／巴旦杏／アメントウ」○元升ノ

曰此註ヲミレハ今ヲララシク来ルアメントウナルヘ

シ・・・ (巻六・三オ)

(古賀) 葡萄牙語・・・アメントウ amendoa 巴旦杏(紅

毛談)。孟桃〔蘭説辨惑〕。蘭語 amandel

【カルメイラ】「セキミツ／石蜜／コホリサタフ」 ○元升曰長

崎ニテ唐人船神ヲマツリアルルヒハ賓客大饗スルトキハ饗糖ヲツクル・・・番名カルメイラト云 (卷七・二八ウ)

(古賀②)カルメイラ カルメイラ。カルメル。Caramel

〔ス〕caramelo (car-am-el-o) 加留女以良 (『倭漢三才図会』軽命蘿。浮石糖。南蛮菓子の一。カルメイラは、葡語 caramelo にあたる。・・・)

【ハステラ】「コントン／餛飩」・・○元升曰南蛮ニハステラト云

モノアリ・・・餛飩ニ似タリ (卷七・二六オ)

(現代) 掲載なし

【フスタシュー】「アゲツコンシ／阿月渾子／フスタシウ」和名鈔

ニ阿月渾子ナシ多識篇ニナンハンハジカミ・・○元升曰フスタシウヨリ来ルフスタシウハ是ナランカ (卷六・三八ウ)

*阿月渾子は、ピスタチオの種子のこと。フスタシウはオランダ語の pistache か。

【マルメル】「ランボツ／榲桲／マルメル」 ○元升曰南蛮ニ云

マルメルナルコトウタカヒナシ (卷六・一四オ) (古賀) 葡萄牙語・・・マルメロ 榲桲。 marmelo

前田・向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

マルメル。アルメロ。カルメイラ。大和本草、本朝世事綺談、倭訓栞参照。

《注》

以下に、本文中で便宜的表記をした文字の画像を掲載する。

(5)	(3)	(1)
	(4)	(2)

《参照文献》

『庖厨備用倭名本草』全一二巻、長崎歴史文化博物館所蔵

なお、博物館所蔵の古典籍は巻一三を欠くため、国立国会図書館デジタルコレクシヨンの画像で補った。

若木太一(二〇〇二)「向井元升著述考―東西文化の接触―」、雅俗、雅俗の会編

近世方言辞書集成 第3巻『物類称呼』(一九九八) 大空社

古賀十二郎(一九二四)『長崎市史 風俗編』

古賀十二郎(二〇〇〇)『古賀十二郎 外来語集覧』長崎文献社

『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇〇) 小学館

『庖厨備用倭名本草』（長崎歴史文化博物館蔵）

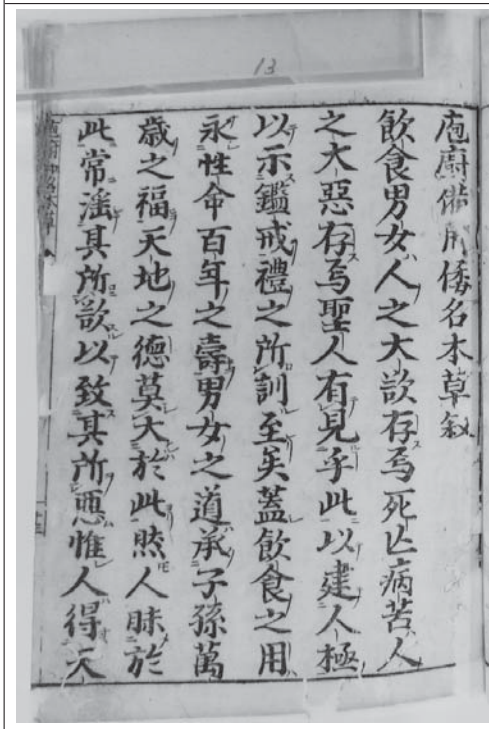
卷二の表紙



*以下に、画像を一部紹介する。

向井元升の自序

食物の害毒と効用、本書執筆の経緯、参照した書物について述べた、四丁にわたる長文。本書には、自序の前に木下順庵、中山三柳、三宅道乙の叙文がある。



ゴウリ (王瓜) 九行目 卷四、二六才 (傍線は前田)

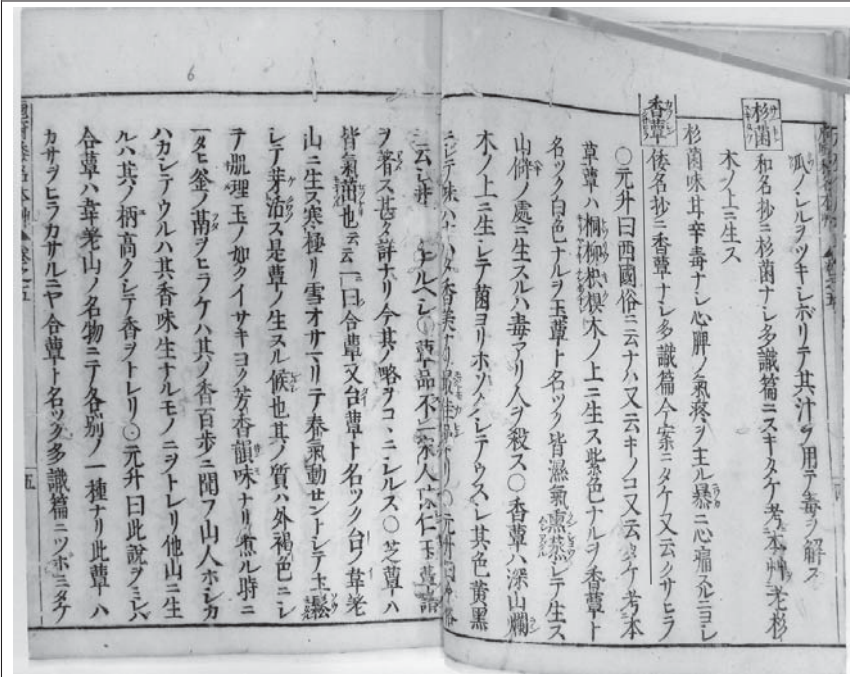
27
王瓜 倭名抄多識篇ニ王瓜ナレ考本艸一名玉瓜三月ニ
苗ヲ生ス其蔓ニヒケオホシ嫩キ時茹ニスヘシ葉ハ
馬蹄ノ如クニテ尖アリ面青ク背淡シ漚テ光ラス
六七月ニ五出ノ小黄花ヲヒラキテムラカル子ヲム
スニテ綴繋タリ熟スル時紅黄ニ色アリ皮モ粗漚
也根ハ栝樓根ノ小キカ如シ澄粉ハナハタ白クコニカ
ナリ二三尺モホリテ正根ヲ得江南人ハ是ヲ裁
テ玉ヲ汰キ根ヲトリテ蔬ニシテ食ス味山藥ノ如シ
○元升曰此ノ註ヲミレバゴウリナレシカラスウリ
トモ云フ

クツゾコ (比目魚) 六行目 卷八、三〇ウ

33
比目魚 倭名抄ニ比目魚ナレ多識篇ニ和名ナレ考本
草一名鰯魚一名鞋底魚海中ニ生スナリクニ牛
腓ノ如シ又女人ノ鞋底ノ如シ細鱗紫白色其半邊
ハ平ニシテ鱗ナレロハ領下ニアリ○元升曰此説ヲ三
レバカレイ也鞋底魚トイヘル肥前ノ俗ニカレイノホソ
キブクツゾコト云ニ同シ世俗ニイレカレイト云類也倭
名鈔ニ毛餘魚ヲカレイト云ハ非也
比目魚味甘、性平、无毒、和氣、力益、多食
スレハ氣ヲ動ス
鰯魚 倭名抄ニ鰯魚ナレ考本艸一名鰯魚
鰯魚味并性平、毒ナシ、五痔、下血、瘀血、腹中ニアルヲ治ス
鰯魚 倭名抄ニサメタ多識篇オナレ考本草一名沙鰯魚
ハ鰯ト云今ハ沙ト云ニ一類ニシテ數種其形並魚
ニ似テ目背ク類アカレ背ト三鬚鼠アリ腹下ニ翅
アリ其味並肥美ナリ南人ハコレヲ珍トス大九八尾
ノ長サ數尺ヨク人ヲ傷ル其皮ニ皆沙アリ真珠ノ
如クニテ斑ラナリ背ニ珠アリ其丈鹿ノ如クニテ
堅ク強キヲ白鹿沙ト云亦白沙ト云ヨク鹿ニ変
ス背ニ斑文アリチ鹿ノ如クニテ斑強ナルル鹿沙ト
云亦湖沙ト云鹿魚ノ所化也真ノ前ニ物アリ谷

前田…向井元升著『庖厨備用和名本草』中の方言リスト

ナバ(「香草」二行目) 卷五、四丁オ



ボウブラ(「南瓜」二行目) 卷四、二三オ

